「共に生きる」ということ
――『底点志向者イエス』に倣って――

かにた婦人の村名誉村長　天　羽　道　子

はじめに

皆さま、こんにちは。このたび、このような大々的な計画をいただいて大変恐縮いたしております。また、先ほど過分なご紹介をいただいて、さらに恐縮をいたしております。

去る5月、かにた婦人の村においでになりました林葉子さんとのお話の中で、林さんは「そのお話を同志社の学生にも聞かせたい」とおっしゃいました。私は「この歳でありますけれども、出かけることはできます」と申し上げたのでしたが、9月に入って本日の計画をお聞きして大変躊躇いたしましたが、お受けさせていただいて、今ここに立たせていただいております。

しかし、その一方で、私にとりましては思いがけず、本当に思いがけず、この重要文化財に指定されている歴史ある礼拝堂に立たせていただいているということに深い感動を覚えております。

私自身、わが国が起こした15年にわたる戦争の時代の中で成人し、更に戦後の社会の悲惨を経験し、今日まで戦後74年を生きてまいりました。そして、今日の世界、ことに私たちの国の社会の状況、有り様に心痛み、また大変憂いております。お若い学生の皆様方はどのようにお受け止めになっていらっしゃるか伺いたい思いとともに、まずは私が何を痛み、何を憂いているのか、

私の経てきた戦後74年の歩みについて、ことに「共に生きる」ことを原点とした、かにた婦人の村の歩みについてお話しさせていただこうと思います。

1　ベテスダ奉仕女母の家の誕生

ベテスダ奉仕女母の家は、1954年5月に誕生しました。そして、同時にそれは「共産共同体」の形成でもありました。奉仕女とはイエスの愛をもって世の悲惨の救済に生涯を捧げて奉仕するという女性のことでありますけれども、奉仕女を志願した4名の志願者と深津文雄牧師を館長に、来日しておられた2名のドイツのディアコニッセを指導姉妹として誕生しました。同時に、共産共同体、一つ屋根の下で財産を共有し、ともに食し、ともに働き、ともに祈り、ともに生きるミットレーベンの歩みが始まりました。

図1　奉仕女の第6回着衣式（1959年5月）

図２　初期の頃の奉仕女たち（1954 年５月着衣した第１期生）
（天羽さんは右から二人目）

そして、その中に「ケース」、傷ついた姉妹たちを一人一人迎えて、包み込み、「共に生きる」道、「保護」ではなく「共生」の道を歩み始めました。開拓してきたと言えるでしょうか。

2　婦人保護事業に取り組む

2.1　いずみ寮の開所

ベテスダ奉仕女母の家誕生の４年後の 1958 年、売春防止法制定２年後に東京都の委託によって 50 名定員の、いずみ寮という婦人保護施設が始められました。入ってこられた方たちの多くが何らかの障害を持っておられることを知り、開所間もないころから深津寮長を中心に、コロニーの必要、コロニーの夢を描き語り始めました。弱い者たち同士で助け合って、何らかの生産をしな

図３　設立当初のいずみ寮

図４　いずみ寮のヒマラヤ杉

がら安心して生活できる場が欲しい。そのコロニーの必要を世に提唱し始めました。そして、7年後に全国唯一の長期入所施設として、かにた婦人の村を開所しました。

2.2 「かにた婦人の村」の開所

かにた婦人の村が開所したのは1965年4月1日です。驚くべきことに、その開所の日に兵庫県から5名の方たちが入所し、さらに4月中の1カ月の間に13都道府県から54名もの方たちが、さらにその初年度には18都道府県から84名もの方たちが入所され、施設長をはじめとした職員15名でその方たちをお受けしています。今日においては、とても考えられないことですが、とに

図５　開所直後のかにた婦人の村

かく、ここから非常に独自性の強い、施設らしからぬ施設、生活あるいは暮らしを大切にする「共に生きる」村の開拓が始まり、創造が始められました。門も塀もなく、規則は最小限に、人が作る規則で一人一人を縛らず、大自然の大きな懐の中で、一人一人の主体性を生かすことを大事にし、ただ、禁酒禁煙というお約束をして、村の生活が始められました。

2.3 「底点の発見」

「人間、地上に生を享ける限り、無用なものは存在しない」との創設者の思いと精神、「重い人からいらっしゃい」と入所について呼びかけた創設者の思い、この招きの言葉は「底点の優先」というイエスの生き方から教え示された考え方に端を発しています。底点とは深津牧師の造語で、「底点の発見」と題して掲載された 1983 年 3 月発行の『信徒の友』のコピーをお手元に差し上

げているかと思いますので、後ほどご覧いただきたいと思います。

要するに、頂点に対する底点、底辺ではなくそのどん底の底点を問題にしなければならないと、聖書のルカによる福音書の中に「失われた羊」のたとえが示されていますが、主イエスご自身が社会の中で見捨てられた人々、益もないと思われていた不可触者に関わり、不可触の民に近づいたのは、この失われたものの大切さという逆立ちした価値観をイエスは持っておられたからです。

「底点の優先」という思想は、一人の救済、ことに失われた者の救済ということがイエスの発想の独自性であると創設者は捉え、「重い人からいらっしゃい」という言葉となり、かにた婦人の村のあり方として、あるいは理念として努力目標として掲げられてきました。

ここで頂点志向と底点志向について皆様方に申し上げたいこと

図６　かにた婦人の村の看護棟の落成式（1978 年）

は、ことに若い皆様方が、また学問や研究を追究されている方々が頂点を目指して歩まれているということは当然のことです。そして、さらに頂点を目指して歩んでいただきたいという思いと願いを持っております。

ただ、私たちの生きている社会がその一方、頂点を目指す一方であってよいのか。その方向にみんながみんな向かっているだけでよいのか。誰かが世の底点にあえぐ人々、底点に捨て置かれている問題に心を向けることがなければならないのではないか。そのようなことを思いますとき、ただ皆様方に申し上げたいのは、頂点志向をする中で、底点に置かれた人々の苦しみや問題に対して関係ないこととせず、関心を寄せていただきたいと切望する思いです。

3　かにた婦人の村・54 年の歩み

3.1　生活

かにた婦人の村では、54 年間、創設者が語った「コロニーをコロニーたらしめるものは死ではなく生である、生きることである。それも生きていればよいのではなく、生き生きとしていなければならない」との願いを目標としつつ歩んできました。しかし、これは本当に実現できるのか。一人一人が生き生きと生きていく、その社会といいますか、暮らしが実現できるのか。しかし、一人一人がそうあってほしいとは、日々の願い、日々の祈りです。

かにたの生活に入ってこられる方たちの多くが家庭の生活、家

族の生活の経験の少ない人たちなので、創設者は大きな寮を建ててということよりも、もちろん場所的にかなわなかったことではありますけれども、準小舎制をとり、家族的な生活を望んで、17名入れる寮を6寮建てて、創設から8年間は、女子職員が寮母として一緒に生活をしましたが、9年目にそれを全廃して自治の生活に切り替え、入ってこられた方たちの中から委員と副委員を選び、寮母がしていたことを代行し、寮母だった者は担任という形で関わり、今日に至っております。これは大英断でした。

そして、担任の関わりの中で、自分たちで作り出している寮には、各寮違いがあります。活発な寮があり、また静かな寮があり、社会の中で一般の家々に違いがあるように違いがあるのです。この生活の中で生まれてきたもの、それは決して小さくないのです。毎日のように揉め事が起

図7　かにた婦人の村の文集『かにた』

図8　かにた婦人の村で飼われているヤギ

こり、喧嘩があります。しかし、その喧嘩を通してまず一人一人がお互いの違いを知って、そこから認め合いが、赦し合いが、助け合いが生まれ、優しさが生まれ、どんな人でも受容する人となっていく。もちろん対人関係の難しさに悩み、苦しみ、悲しむ中でです。短期間に生まれるものではありませんが、私はこのかにた50余年の実りであり、果実だと感じています。

3.2　作業、そして共同作業

一方、生活を作り出すような作業があります。この中で一人一人の可能性が発見され、自分は何もできない駄目人間と思ってきた人の中に自己肯定感が生まれ、また安定し、それに誇りを持つようになり、ある姉妹は言いました。「私はお百姓さん」。もう30年以上農園のお仕事を続けている姉妹です。12の作業班が生まれましたが、現在は農園で野菜を作り、果物を作り、そして毎朝のパンを焼くパン屋さん、そしてもちろん給食の調理。それから、毎日使っているリネン類の洗濯、陶芸。それから、手芸。あるいは使用済み切手の整理など。その中から自分で仕事を選び、そこで作業をする中で、自分はこれならできるという自信と誇りを持つことができるようになってくるのです。

かにたを作り出すのに共同作業という、自分たちでできることはなんでも自分たちで、もちろんお金がないということもありますけれども、教会堂も1年4カ月かけてみんなの手作りで建てた教会堂ですが、それは全員の参加です。強く元気な人は弱い人を仲間に入れて、一つ目的のためにみんなで一緒に汗を流す。目的

が達成したときの喜びを共にすることを通して、共同体の意識の芽生えがあり、一人一人が入所者として受け身の立場から自分の力を差し出す立場に、受動から能動的立場に。そして、何よりも一人一人がかにた婦人の村の創造に参与している。それは、一人一人にとってどんなに誇らしいことでしょうか。このことを思いますときに、私は本当に一人一人に対しての尊敬の念を強くいたします。

3.3　行事、そして「かにた文化」

各年度の事業計画の中に、年間行事計画も含められ、月1回の誕生会、月1回の「アルクゾー」(1986年1月22日、毎月1回のアルクゾーを始める。体力に応じて10km、7km、5kmのコース

図9　ALKZOのうた

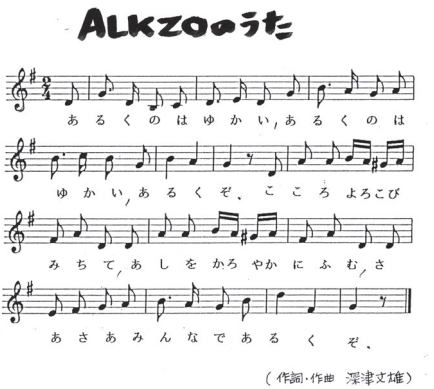

図 10　村人の手芸作品

を全員で。現在は 6km、3km、1km と「青空」の 4 コースで実施)、春と秋の遠足、隔年の一泊旅行、復活祭、収穫感謝祭、降誕祭など、比較的に行事は多く、また、生活、作業、行事を通して「かにた文化」が育てられてきました。

3.4　職員の在り方

職員として大切にしたいこととして、⑴入所して村人となった一人一人の違いを認め、一人一人の人権の尊厳に対する認識と謙虚な思いを持つこと。⑵困った人にも、困った人として排除せず、受容すること。裁くことよりも赦すこと。信じて待ち、信頼関係を築く。⑶上からの目線、上からの物言いは、最も慎まなければならないこと。⑷「底点志向」とは、強者が底点に降り、底点の立場に立ち、手を携えて共に上を目指すことでなければならないことを充分に理解したい、と考えております。

4　今日の社会の中で

最後に、ひと言、申し上げさせていただきます。今日の社会の文明といったらよいでしょうか、状況に、私は大変危機感を抱いておりますことを申し上げたいと思います。

まず、命の重さです。人の命は地球より重いと言われていた考えや言葉は失われてしまったのでしょうか。虐待があり、さらには命があやめられている。これらをどう考えたらよいのでしょうか。あの相模原事件が起こったことに対し、私は事件を起こした人はもちろん当然問題にされなければならないと思いつつも、「なぜそうなってしまったのか」、その加害者を生み出している今日の社会が厳しく問われなければならないのではないだろうかと思われてなりません。

人間に対する尊厳の思想と人権意識の低さ、そして違った者、ことに弱者に対する偏見と差別、そして排除と不寛容。人の痛みに対する想像力、あるいは共感力、相手の立場に立つ能力の欠如。

これらは経済優先、利潤追求、自己中心的な社会の中で起きてしまっているのではないでしょうか。この社会の中で子どもたちがどう育っていくのでしょうか。大人の責任を深く感じます。私たちは社会の一員として、私たちの住む社会をより良くしていく務めを担っているのではないでしょうか。このことを最後に申し上げて、拙い話を終わらせていただきます。ありがとうございました。